

学 位 論 文 要 旨

氏 名 萩中 奈穂美

題 目 国語科における「語彙学習力」の育成に関する研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究では、国語科において語彙を学び続ける力をいかに育成するかという課題に取り組み、先行研究と実践を手掛かりに研究を進め、「語彙学習力」について育成の必要性を確かめ、概念規定をした上で、育成すべき力を「『語彙学習力』の要素構造図（試案）」として提出した。

序章においては、指導される語彙の限界性や語彙が生涯増え続ける可能性を踏まえ、「語彙学習力」を身に付ける重要性を述べた。またその力の育成は、適時性に鑑み中学校において重点的に行うべきであることを述べた。

第1章「語彙指導の目標と内容に関わる史的考察」では、これまで国語科の語彙指導の目標と内容を概観し、その中に「語彙学習力」育成の視点を把握した。これは、全7期分（昭和33年版～平成29年版）の中学校学習指導要領の国語科における語彙に関する指導事項を考察対象とした。これを通して、語句指導から語彙指導へ流れがあること、語彙の指導事項が言語活動の領域から知識へと移され、知識に位置付けられた指導事項の内容が漸次肥大化したこと、「語彙を豊かにする」ことつまり語彙を学ぶことへの志向が確認された。

第2章「『語彙を自ら学ぶ力』に関する先行研究の検討」では、語句指導期、語彙概念の導入期、語彙指導の認識定着期、語彙指導の改善・充実期の4期に分けて指摘内容を検討した。その結果、「語彙を自ら学ぶ力」育成の必要は幾度も指摘されたものの、指導における自然習得の扱い、力を発揮する場や機会、「語彙力」と「語彙を学ぶ力」との関係、語彙を学ぶ力の育成の目的、語彙学習の到達点、能力の種類、育成の場や機会の7点において揺れが見られた。これらを踏まえて、研究課題を「育成すべき『語彙学習力』はどのような力か」「育成すべき『語彙学習力』の内実は何か」「語彙学習力」はどのように育成するか」に設定した。

第3章「『語彙学習力』の規定と要素の導出」では、第2章で指摘した7点の揺れを検討し、その結果を基に「語彙学習力」を「既存のものが語彙体系を拡充するために、言語生活の中で、必要な語彙について、意識を働かせ、適切な方法を用いながら、主体的に学び続ける力であり、それを支える力の総体である」と規定した。さらに、自己学習力や自己調整学習の概念を参考に「語彙学習力」の内実として六つの要素を導出し、その枠組みと概要を図示した。

第4章「『語彙学習力』の各要素の内部項目の導出」では、六つの要素の内部項目を先行研究から導出し「『語彙学習力』の要素構造図（試案）」として提示した。具体的には、〔A〕語彙学習方略の知識と技能として、語句自体を理解する方略（第1層）、語句と語句の関連付ける方略（第2層）、定着・深化する方略（第3層）、これらの基盤として語彙環境や語彙経験を選択・活用・充実する方略（基盤層）を置いた。〔B〕語彙の体系的性の理解と語彙論の知識は、語彙学習には不可欠の語彙の体系的性を基盤にした、意味、意味体系、語構成、形式、語種などの語彙論の知識である。〔C〕語彙情報の検索スキル（辞書を中心に）は、正確で客観的な語彙情報を得るための検索のスキルで、辞書の凡例の理解、類語辞典など多様な辞典の利用法、端末機器を使った検索エンジンでの検索などを取り上げて考察した。〔D〕動機づけとしての語彙の価値認識は、教育心理学における「課題内生的価値」と「課題外生的価値」の枠組みを援用し、大学生の自己省察を基に具体化して整理した。〔E〕自分の語彙や語彙学習に対するメタ認知は、自分の語彙と語彙学習に対する、モニタリングとコントロールに絞って内容を示した。〔F〕適切な語彙学習観は、語彙学習に対する望ましい信念として、育成すべきことを述べた。

第5章「語彙学習を支える二つの思考力」では、望ましい語彙学習の在り方を示したのとして大村はまの『ことばの勉強会』を分析し、語彙学習に働かせる思考を整理した。その結果、論理的思考力として、具体と抽象、類推、観点・比較・分類・順序、適用・評価・条件・限定を、感性的思考力として、語感の感受、語彙と文脈との整合性の直感、語彙への愛着と意識、自分と語彙との関わりの意識に整理した。

第6章「『語彙学習力』育成を目指す単元の実践的検討」では、中学生を対象にした実践した三つの語彙単元を通して「語彙学習力」の育成方法について考察した。これによって、以下の方法論の有効性が示唆された、すなわち、具体的な表現対象に照らしながら学習者が協働的にまた個人的に語彙の体系づくりをすること、語彙の見方を獲得する学習を表現活動に挿入する学習過程を設定し、自分の語彙使用に対する省察活動を行わせること、語感の価値を享受しやすい教材を開発し、享受した語感を言語化させること、である。

終章では、本研究の総括として「『語彙学習力』の要素構造図（試案）」によって「語彙学習力」育成のための語彙指導の在り方を開拓する視点を得ることができるという活用の可能性を、展望として「構造図」の要素や内部項目の軽重や前後関係を明らかにして指導に資するものに改善すること、また実践を通した育成方法をさらに開発することについて述べた。